

第1回岩室あなぐま芸術祭とは何だったのか

海老田大五朗¹⁾ 小倉 壮平²⁾ 高橋 和枝³⁾ 高橋トオル⁴⁾
岡村 翼⁵⁾ 近山 理子⁶⁾ 小林 弘樹⁷⁾ 石本 貴之⁸⁾

- 1) 新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科
- 2) NPO法人 いわむろや
- 3) スプーンフィールド
- 4) ツムジグラフィカ
- 5) NPO法人 いわむろや
- 6) 新潟市地域包括支援センター岩室
- 7) Niigata Interview Magazine Life-mag.
- 8) 認定NPO法人 新潟NPO協会

What was 'iwamuro anaguma Arts Festival vol.1'?

Daigoro Ebita¹⁾ Soohei Ogura²⁾ Kazue Takahashi³⁾ Tooru Takahashi⁴⁾
Tsubasa Okamura⁵⁾ Ayako Chikayama⁶⁾ Hiroki Kobayashi⁷⁾ Takayuki Ishimoto⁸⁾

- 1) Niigata Seiryu University, Faculty of Social Welfare and Psychology, Department of Clinical Psychology
- 2) Non-Profit Organization IWAMUROYA
- 3) Spoon Field
- 4) Tsumuji-Graphica
- 5) Non-Profit Organization IWAMUROYA
- 6) Community Comprehensive Care Center IWAMURO in Niigata-City
- 7) Niigata Interview Magazine Life-mag.
- 8) Niigata Association of Nonprofits

キーワード

岩室あなぐま芸術祭、障がい者アート、ロバート・キング・マートン、機能、芸術社会学

Key words

iwamuro anaguma Arts Festival, Art Brut, Robert King Merton, Function, Sociology of Art

I はじめに

2018（平成30）年9月1日（土）から9日（日）の期間、「岩室あなぐま芸術祭」が新潟市西蒲区岩室温泉地区で試験的に開催された（写真1）。主に地元の障がい^{注1}者が製作したアート作品が、温泉街の旅館・ホテル、飲食店、寺など13箇所で展示された^{注2}。健全者に都合よく設計された社会側が、「障がい」というハードルを生み出している現状において、多様性への理解→多様性の獲得→豊かな社会（持続可能な地域）の実現の契機になることが、この芸術祭のミッションである。

「岩室あなぐま芸術祭」は、2000（平成12）年に同じく新潟県越後妻有地域で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や2010年に開催された「瀬戸内国際芸術祭」の系譜、簡略的に言えば「アートの力を使った地域活性化イベント」の1つりとして位置づけることができるかもしれない。

他方で「岩室あなぐま芸術祭」には、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や新潟市が主催する「土と水の芸術祭」とは明確に一線を画す特徴もある。展示される芸術作品が、基本的には何らかの障がいをもつ作家たちによって製作された作品^{注3}なのだ。

「岩室あなぐま芸術祭」の中心にあった理念は、人と福祉、人と地域、そして人と人との間に生じる価値や関係性への理解である。「岩室あなぐま芸術祭」は、温泉街で伝統的に実践されてきたおもてなしの精神と、障がい福祉の多様性を認め合いながら支え合う精神の融合を表象するためのイベントである。したがってこの事業は、いわゆる商業的な地域活性化を含めた、福祉、芸術、地域の連携による地域福祉活性化も目的としている。



写真1 岩室あなぐま芸術祭のチラシ

II 研究方法

北田によれば、「アートだからこそ発揮できる機能、機能的な等価物と入れ替え不可能なアートのあり方を考えていくためには、アートの自律性ととも、社会におけるアートという実践の機能を精査していく必要がある」²⁾が、本研究はまさに「岩室あなぐま芸術祭」における障がい者アートの、あるいはそれらの作品を街に飾ることの機能を精査することを目的とする。

本研究における「機能」という用語、及び「機能分析」という分析手法は、基本的にマートン³⁾の定式化にしたがっている。マートンによれば、人間社会の研究における「機能function」とは、数学的意味での「関数function」と、生物学的意味での「有機体の維持に役立つという観点からみた生命的または有機的過程」という意味での「機能function」から導きかれる、「社会体系または文化体系において演ずる役割」としての「機能function」である。「機能の概念は、観察者の見地を含み、必ずしも当事者の見地を含まない。社会的機能とは、観察しうる客観的諸結果を指すのであって、主観的意向（ねらい、動機、目的）を指すのではない」³⁾（下線強調は原著だと太字強調）。マートンによれば、機能は（順）機能と逆機能に区別される。観察の結果から、一定の体系の適応ないし調整を「促すもの」が（順）機能であり、「減ずるもの」が逆機能である。さらに、マートンは社会的機能を顕在的機能（一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果であって、この体系の参加者によって意図され認知されたもの）と潜在的機能（一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果であって、意図されず、認知されないもの）に分類する。特に「潜在的機能の発見は、社会学的知識を大いに増進させる」³⁾とマートンは述べている。

「アートは確かに感性的な刺激を、単なる刺激から別の価値へと変換する特殊な機能を有しているが、アートがその実践の価値を社会の中で確かなものとするためには、社会の複雑性を理解し、社会との関わり方、社会への力の及ぼし方を丁寧に検討することが求められる」⁴⁾⁵⁾はずで、本報告が目指す方向もこのような方向である。ただし、紙幅の関係もあり、本報告では実際に開催された芸術祭の様子については最小限の報告にとどめ、「岩室あなぐま芸術祭」における2つの機能（①岩室コミュニティ及びステークホルダーに期

待される「参加」を促す機能、②障がい者アートそのものに潜在する機能)に焦点を当てて考察する。

Ⅲ 研究対象

1. 研究対象その1:「いわむろや」と新潟市西蒲区岩室地区の課題

1) 「いわむろや」の誕生

話は10年以上遡る。2006(平成18)年、地元住民・観光業者・商店主で構成する「いわむろのみらい研究会」が、地域のまちづくり計画策定をめざして発足した。そこから、武蔵野美術大学と岩室地区との産官学連携事業などに取り組み、2010(平成22)年に誕生した「新潟市岩室観光施設」の指定管理者申請に向け、「いわむろのみらい研究会」を母体に「いわむろや」はNPO法人化された。「いわむろや」は、岩室温泉地域がいきいきとした暮らしやすい魅力ある地域であるために、岩室の未来づくりと、人のあたたかさや真心を伝えることをモットーに活動している。地域の住民及び観光、農業、漁業、商工業など様々な人たちと共に、観光や交流に訪れるお客様にも楽しく過ごせる地域づくりを目指している。各種産業を支援したり、各種事業を行い、住民生活の安定と地域の発展に寄与することが、「いわむろや」設置の目的である。この「いわむろや」が岩室あなぐま芸術祭のベースキャンプとなり、芸術祭運営における中心的な役割を果たした。

佐藤⁶⁾は、協働の場としてのプラットフォームという視点からコミュニティビジネス(以下CB)を検討している。「ここでいうプラットフォームとは、CBを事業として展開していくうえで、地域の人材や組織を媒介し、事業を支援する場のことである。それは今日の多元的社会にあって、ソーシャルインクルージョンという目標を達成するために、協働により地域社会の生活問題を把握して、問題

解決のためのヒト、モノ、カネ、情報、組織などの社会資源を動員し、ネットワーク化を進めるとともに、参加者のそれぞれの立場を超えて協力関係を作り出し、新たな価値の創出を図るとともに、各種サービスの需要と供給をコーディネートするCBのための場である」としている。

「いわむろや」は公設民営の観光施設であり、地域の多様な人・団体と活動を有機的に繋げるプラットフォームとして地域活性に向けた活動を行っている。「いわむろや」が設置される前の2010(平成22)年以前は、年間数回程度であった地域でのイベントが、法人スタッフと地域有志の活躍で大小年間40回以上の実績を積みあげている。こうした活動は徐々に広範囲へ広まっていき、岩室温泉地区は、老舗温泉地区のイメージから元気な温泉地のイメージに変容しつつある。

2) コミュニティデザイナー^{注4}小倉壮平^{注5}の誕生

いわむろや初代館長の小倉壮平は、東京都杉並区出身で武蔵野美術大学卒^{注6}という、生粋の都会人であり、岩室地区からみれば「よそ者」であった。武蔵野美術大学と岩室地区の連携事業に学生時代から携わり、次第に岩室地区の魅力に惹かれていった。小倉が結婚したその年に、正式ないわむろや館長就任依頼があり、半年悩んだ。だが、東京で悶々と悩んでいるよりは、岩室に移り住んでから考えようと思い、まずは単身で岩室に移り住んだ。小倉は、岩室地区の情報を中心に、新潟市西蒲区全体の観光情報を発信している。

小倉にとって、地域の豊かさを促し、多様性を受け入れる地域文化をうみ出すための新事業立ち上げを考える機会となったのが、障がいのある方のアート作品であった。障がいの理解から差異があることへの理解、そして多様性の理解へとまちぐるみで多様性を獲得する挑戦を小倉は行いたいと思った。そこで

小倉が目をつけたのが、高橋和枝の事業である。高橋和枝はNPO法人アートキャンプ新潟のスタッフとして、障がい者アートを街に展示する試みをしていた。新潟県小千谷市にある極楽寺で高橋和枝がプロデュースした「アール・ブリュット展 in 極楽寺 ～一如ありのままにとけこむ～」^{注7}を小倉が観に行き、そこで「来年岩室でもアール・ブリュット展を開催できないか」を高橋和枝に対して打診している。

3) 新潟市西蒲区岩室地区の課題

岩室温泉地域は、日本の他の地方産業と同様に産業規模の縮小、高齢化など、経済的な低迷が続いている。そんななか、岩室温泉地域を少し俯瞰して見ると、岩室温泉周辺には福祉・医療施設があり、そこに通う人びとがいることに気付かされる。この分断された状況において、福祉の世界からこの地域を考えたとき、観光の世界には一人ひとりへの配慮が足りないように思われた。元来、観光地にはおもてなしとして息づく文化があるはずである。小倉の目からみて、岩室温泉地域には、分断された地域内の関係性を再構築することと、交流していく暮らしの豊かさの機会提供の必要性が感じられた。

実際岩室温泉街の人びとからも次のような声が小倉のもとへ寄せられた。「自分たちはおもてなしのプロであるはずなのに、車椅子に乗った高齢者や障害者たちを宿泊客として十分に受け入れできていなかった。そういった困難をもつ人でも安心して宿泊していただけるような岩室温泉街にしたい」と。

2. 研究対象その2：「岩室あなぐま芸術祭」と障がい者が製作する芸術作品

1) シンボルマークから読み解く岩室「あなぐま」芸術祭の謎

岩室あなぐま芸術祭のシンボルマーク^{注8}はツムジグラフィカの高橋トオルによってデ



図1 シンボルマーク

ザインされた(図1参照)。そもそも岩室「あなぐま」芸術祭は、なぜ「あなぐま」なのか。この「あなぐま」には多様な意味づけがなされている。高橋トオルによれば、温泉を表象する温泉マークを縦にして、あな「ぐま」を想起できるような耳をつけ、この何かに似ているようで何ものでもないシンボルマークを示すことで「岩室に何かが見えた。でもそれは何だろう?」と、見る人たちに謎かけをしている。さらには、温泉マークを縦にすることで「穴(あな)」から風が出ているように見せている。風「穴(あな)」の登場である。謎があつて「穴(あな)」がある。このシンボルマークは「お互いを知るために、風「穴(あな)」を覗き込む」^{注9}ことをアフォードし、「障がいの理解から差異(謎)があることへの理解、そして多様性(謎)の理解へとまちぐるみで多様性を獲得する」ことを図像化している。

2) 障がい者の製作する芸術作品を指す名称について

ここで、障がい者の製作する芸術作品を指す名称について確認しておきたい。障がい者の製作する芸術作品は、しばしば「アール・ブリュット」、「アウトサイダーアート」^{注10}などと呼ばれる。「アール・ブリュット art brut」とは、直訳すると「生の芸術」、「加工されていない芸術」となる。他方、「アウトサイダーアート」の「アウトサイダー」とは、「正規の美術教育を受けていない者による芸術」⁷⁸⁾(cf.制度化される芸術)」である。服部によれば、「アウトサイダー・アートを見ていると、私たちがあたりまえのものと思い込んで受け

入れているさまざまな事柄が、実は片寄った物の見方にすぎないこと、そこには脆弱な基盤しかないことがわかる。(中略)と同時にそれは、世間一般で芸術と呼ばれているものが、多くの芸術的表現の可能性を切り捨てたうえで成立しているということにも気づかせてくれ」と述べている。「アウトサイダー・アートでは、社会の規範と照らし合わせて、それがいかに大胆であるかが重要」⁹⁾なのだ。

日本においては、「アール・ブリュット」も「アウトサイダーアート」も、どちらも障がい者アートの言い換えとして流布しているが、それぞれの語の違いについては、それぞれ対になっている概念や誕生の歴史を検討すると、見通しよく整理することができる。「アール・ブリュット」は、「それまで『精神病患者の芸術』とか、『精神分裂病(現代の用語では統合失調症)の芸術』などと呼ばれることの多かった作品を、医学の分野から切り離したいという考え」¹⁰⁾から生じた呼称である。別様の言い方をすれば、「生の」「加工されていない」という意味のフランス語brutとは、障がいをもつ作家に貼られた「精神病」者というラベルを脱医療化し、人間がもつ「生の」「本能のおもむくままの」くらいの意味で使われていることがわかるだろう。他方、「アウトサイダー・アート」の対になるのは「インサイダー・アート」である。「アウトサイダー=正規の美術教育を受けていない」人なので、インサイダーは「正規の美術教育を受けている」人のことになる。つまり「アウトサイダー・アート」は、正規美術教育によって生み出される美術・芸術と対をなすような概念であり、正規美術教育を受けた者による作品の相対化を導く機能をもつ。

また、服部¹¹⁾は西洋型/日本型アウトサイダー・アートという区別を持ち込み、それぞれの志向性について、式場隆三郎のライフヒストリーをなぞりながら、次のように説明している。

式場隆三郎は、ヨーロッパのアウトサイダー・アートの概念をいち早く日本に輸入しながらも、戦後にはアウトサイダー・アートを社会運動のための効果的な道具として機能させる方向に進んだ。それは、純粹に芸術性を志向しようとする西洋型のアウトサイダー・アートから、常に社会福祉の問題と一体化した日本型の「障害者芸術」への転向だった。

服部¹²⁾によれば、美術や芸術ではなく、「アート」という言葉を多用するこの傾向は、日本の福祉施設の芸術との関わり方を象徴的に示している。

IV 岩室あなぐま芸術祭開催期間中の様子：住民参加の仕掛けを中心に

困難のある人を排除するのではなく、互いのちからを発揮することができたら、みんなにとって住みやすい世界がうまれるのではないか。岩室あなぐま芸術祭では、アートを通じてきっかけを作り、対話するところから多様性を重ね合わせた。障がい福祉も高齢福祉もまちづくりも観光も全てが一緒になり、温泉街がアートで彩られた(写真2及び図2^{注11)})。



写真2 ホテル大橋

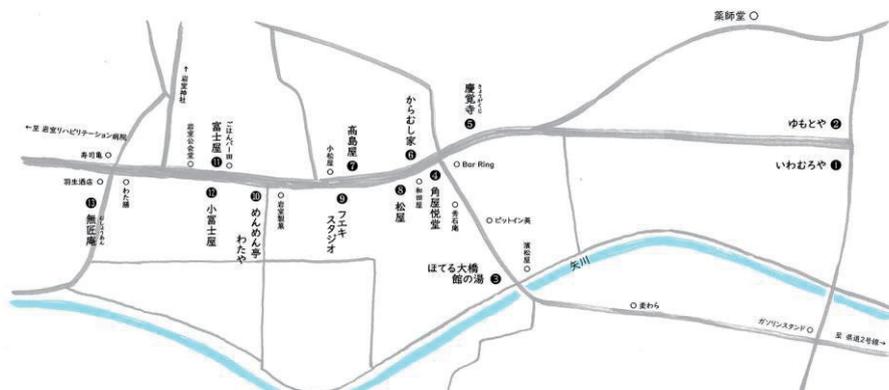


図2 地図あなぐま

これらのアート作品は、「理解を深める対話の機会」として、この芸術祭では機能している。次のようなエピソードがある。からむし家で作品を見ていたとき、店主が海老田に話しかけてきた。会話の内容は、「からむし家」に飾られていた障がい者アート作品についてである。そこから「からむし家」に置かれていた「幻聴妄想かるた^{注12}」の話に移行した。こうしたエピソードは、アート作品を契機にした対話から生まれた日常の一端である。

1. ギャラリーとしての温泉街の整備

ギャラリーである慶覚寺や角屋悦堂には、ある企業の寄付で臨時のスロープや手すりが設置された。岩室地域の高齢者施設の入居者にも芸術祭の作品を見せてあげたいという声を聴いて、近山からある企業で働く岩室地区の出身者に声をかけたところ、地元のためにと、ご厚意で設置してくれたとのことであった。地元の高校生たちも庭仕事をしたり、芸術祭の準備も手伝った。

2. 住民参加の仕掛けとしてのイベント

岩室あなぐま芸術祭期間中、各種のイベント（表1参照）が企画運営された。こうした

イベントのほぼ全てが住民参加を企図している。9月2日に行われたRUN伴合同ワークショップ「たてのいと・よこのいと」は、認知症の理解を広めるためのイベントであり、地元の方たちが集まって一枚の布を織った。芸術祭が終わった後もこの布は「いわむろや」の天井に飾られている^{注13}が、芸術祭が終わった後も、このイベントに参加した女性たちがボランティアに集合し、この布の仕上げとして補強作業をしている。9月4日と9月7日には海老田とおらってにいがた市民エネルギー協議会の共催として、『コミュニティビジネスで拓く地域と福祉』¹³⁾の読書会が開催された。ビジネスと福祉的なものの共存について、この本をもとにディスカッションが繰り広げられた。9月6日の哲学対話では、新潟大学の阿部ふく子准教授コーディネイトのもと、「障がいとは？アートとは？分けるとは？」という問いに対し、多くの一般の人びとが参加してディスカッションした。岩室地区の社会福祉法人すこやか福祉会が運営するかたくりの里では、パラリンピック競技であるボッチャの試合が9月5日と8日に開催され、高齢者らや保育園児も参加した。これらの芸術祭期間中に開催されたイベント

表1 岩室あなぐま芸術祭期間中のイベント

日時	会場	イベント名	料金	主な企画者	備考
2018/09/01(土) 11:00-11:30	いわむろや	オープニング 「スマイルコンサート」	無料	岡村 翼	
2018/09/02(日) 12:30-13:30	いわむろや (芝生広場)	RUN 伴合同ワークショップ 「たてのいと・よこのいと」	無料		
2018/09/04(火) 14:00-16:00	ほてる大橋	持続可能な地域づくりを考える 読書会 第一部	1,000円	海老田大五朗、おらっ てにいがた市民エネ ルギー協議会	*資料・お茶代
2018/09/05(水) 10:30-11:30	かたくりの里	みんなパラリンアスリート vol.1 カーリンコン遊戯会	無料	社会福祉法人すこやか 福祉会かたくりの里	*岩室保育園園児も参 加
2018/09/06(木) 19:00-21:00	いわむろや (伝承文化伝承館)	哲学対話 「障害とアートと哲学と」	500円	阿部ふく子(新潟大学 人文学部准教授)	
2018/09/07(金) 18:30-20:30	いわむろや (伝承文化伝承館)	持続可能な地域づくりを考える 読書会 第二部	1,000円	海老田大五朗、おらっ てにいがた市民エネ ルギー協議会	*資料・お茶代
2018/09/08(土) 13:30-15:00	かたくりの里	みんなパラリンアスリート vol.2 ポッチャ遊戯会	無料	社会福祉法人すこやか 福祉会かたくりの里、	*音楽パフォーマンス も同時開催
2018/09/08(土) 17:00-	いわむろや (展示室)	つばめのブックバー (あなぐま出張編)	1500円	つばめの学校	*1ドリンク付
2018/09/09(日) 15:00- 映画 17:00-ライブ	ゆもとや	クロージング 映画「おだやかな 革命」上映会 & フィナーレ岡村 翼・原生真ライブ	カンパ 500円	岡村 翼、原生真、お らってにいがた市民エ ネルギー協議会	

は、コミュニティ概念と強く結びつく、「住民参加」を促す機能を担っている。

V 作家の顔が見える芸術祭

岩室あなぐま芸術祭は、日々創作活動に励む作家たちの、作品発表の場でもある。「Niigata Interview Magazine Life-mag.」^{注14)}のブログページ^{注15)}では、8月に岩室あなぐま芸術祭の特集が生まれ、3名の作家の創作活動などの取材記事が掲載された。そのなかでも、作家である岡村佐久一について書かれた記事を、長いが引用する。

引用1

「にしかん障がい者アート展「あなぐま芸術祭」によせて(2)」

岡村さんは現在62歳。1994年、38歳の時に交通事故で頸椎を骨折。両手両足の自由を失った。

「ケガをした当初は手足はまた動くようになるだろうと思って、現実を受け入れられなかったです。治療後、手足は今後も動かないだろうと告知されたのは事故から6ヶ月が過ぎた頃。先をを考えても真っ暗。電動の車椅子を用意された時もありハビリをボイコットしました」。

リハビリのために口に筆をくわえて文字を

書き始めたのは入院から1年ほどたった頃。
「事故の年が明けて1995年。阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件がありましたよね。病院のテレビでニュースを見ていて思いました。わたしも悔しい思いをしましたが、もっと過酷な状況にある人もいます。俺もこんなことで負けてられないなって思い始めました」。
事故後はじめて書いた文章「心への点火は魂の燃焼によらねばならぬ」

ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと...、岡村さんは一本の線を結び始めた。さらに1年が過ぎた頃、今度は絵を描き始めた。お見舞いでもらった花からだった。

「俺が書いたもので初めて喜んでくれた人は介護の研修で来ていた関川さん。うれしかったね」

関川さんは岡村さんが練習で書いていた文字やスケッチを「もらっていい?」と尋ね、持ち帰ったという。

「〈人生に定年はない〉という文字を書いて頼まれてね」と岡村さん。

燕労災病院での2年6ヶ月の入院、治療をへて退院。入院直後に「一生取れないだろう」と言われていた人工呼吸器は、肺の奇跡的な回復により外れていた。退院から20年以上が過ぎたいまも口にくわえた筆で水彩画を描き続けている。(写真3参照)

(後略)



写真3 ブナ林 (岡村佐久一 作)

VI 地域円卓会議における総括

2019(平成31)年2月13日、いわむろやにて、「岩室あなぐま芸術祭」をテーマに、第1回地域円卓会議が開催された。地域円卓会議とは、マルチステークホルダーアプローチ^{注17}として、行政、NPO、メディア、学術機関など地域の多様な主体が参画し、課題解決を目指して、課題の本質・論点を共有する場のことである。この第1回地域円卓会議のねらいは、第1回岩室あなぐま芸術祭で起こった変化、今後の展望を地域の関係者と共有することにあった。コーディネーターは石本貴之で、論点提供者は高橋和枝と小倉である。センターメンバーは、難波優樹(新潟県県民生活・環境部文化振興課)、増田稔(すこやか福祉社会かたくりの里施設長)、角地智史(新潟県アールブリュットサポートセンターNASCアートディレクター)、高島勝郎(岩室温泉観光協会会長)、真島彰夫(岩室地域コミュニティ協議会会長)、前山裕司(新潟市美術館館長)、小林弘樹、海老田大五朗であった。地域円卓会議として多様なフィールドで活動しているキーパーソンをセンターメンバーとして「いわむろや」に招聘することで、岩室あなぐま芸術祭のステークホルダーを拡充する機能がこの地域円卓会議にはあることがわかる。

この地域円卓会議でどのようなことが話し合われたかは、図3を参照して欲しい。このグラフィックレコーディング^{注18}の実物はいわむろやに掲示してある。そして第1回岩室あなぐま芸術祭が何であったのか、その答えは第2回岩室あなぐま芸術祭の中にある。

VI まとめにかえて

本事例報告は、第1回岩室あなぐま芸術祭において、障がい者アートそのもの、あるいは障がい者アートを街に飾ることの機能を精



図3 地域円卓会議のグラフィックレコーディング

査することであった。岩室温泉地区の課題に対し、小倉が仕掛けたのは、課題の直接解決というより、温泉街の人びとと生きづらさを抱えながら生きている人びととの対話の契機としての岩室あなぐま芸術祭を開催することであった。

マートの機能概念に基づき、本研究報告から明らかになったことを整理しよう。芸術祭期間中に様々なイベントを動かすことで、住民が芸術祭に参加する機能が埋め込まれている。こうした契機を人びとへ提供し、多様性の理解から豊かな社会へという図式を表象する機能そのものが、第1回岩室あなぐま芸術祭だったといえるだろう。これは、岩室あなぐま芸術祭が目的としていることでもあり、顕在的な（順）機能と言えるだろう。

では、潜在的な（順）機能はどうであろうか。ここでは、3つの潜在的な（順）機能を挙げてみたい。まず（3章2節2項より）、**①「障がい者アート」それ自体にメインストリーム、マジョリティの世界を相対化する機能が実装されていることがあげられる。**こう

した障がい者アートそのものに埋め込まれている機能について、主催者側は必ずしも言語化できていたわけではなかった。2つめとして（4章より）、イベントに参加しても、あるいは特別イベントに参加しなくても、**②オーディエンス（特に高齢者や障がい者）に、障がい者アート作品が飾られた岩室温泉街を歩き回らせることが挙げられる。**これはどういうことだろうか。アート作品は人を歩かせることを目的として製作されているわけではない。街中に作品が飾られることで人を歩かせることが可能になる。温泉街の散策はオーディエンスの心身の健康を促すことにつながる。3つ目として（5章より）**③障がい者はアート作品を製作することで、障がい者は「自分は作家である」というアイデンティティを持てるようになることも指摘できるだろう。**つまり、日々創作活動を行ない、岩室あなぐま芸術祭に作品を発表することで、この社会の中で障がい者を位置づけるためのカテゴリーが1つ増える。文字通り、この社会の中で障がい者本人の居場所が1つ増えることにな

り、そこから発生する関係性も増えることになる。

他方、本報告の限界は、紙幅の関係上その他の（順）機能及び顕在的・潜在的逆機能を析出できなかった点である。岩室あなぐま芸術祭は第2回も開催することが決定しているので、こうした点については今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、平成31（2019）年度新潟青陵大学共同研究費ならびにJSPS学術研究助成基金助成金（19K13953）を受けた成果の一部である。記して感謝の意を表す。

文献

- 1) 星野太, 奥本素子. インタビュー:アートが地域を変えるのか? 地域がアートを変えるのか?. 科学技術コミュニケーション. 2017; 22: 71-83.
- 2) 北田暁大, 神野真吾, 竹田恵子編著. 社会の芸術/芸術という社会—社会とアートの関係、その再創造に向けて. 3. 東京: フィルムアート社; 2016.
- 3) Merton RK. 森東吾, 森好夫, 金沢実, 中島竜太郎. 社会理論と社会構造. 16-77. 東京: みすず書房; 1961.
- 4) 神野真吾. 公共（性）とアート: 「社会の芸術」の実現にあたって. 社会の芸術/芸術という社会—社会とアートの関係、その再創造に向けて. 284. 東京: フィルムアート社; 2016.
- 5) Dickie G. 今井晋. 芸術とはなにか: 制度的分析. 分析美学基本論文集. 西村清和編・監訳. 43. 東京: 勁草書房; 2015.
- 6) 佐藤貴洋. 地域福祉におけるコミュニティビジネスの位置と役割: 協働を導くステークホルダーと協働の場としてのプラットフォームの視点から. コミュニティビジネスで拓く地域と福祉. 諫山正監修. 154. 京都市: ナカニシヤ出版; 2018.
- 7) Gehlen A. 池井望. 現代絵画の社会学と美学—時代の画像. 43. 京都市: 世界思想社; 2004.
- 8) 矢崎慶太郎. 芸術の自律化と制度化についての芸術社会学. 専修人間科学論集社会学篇. 2014; 4(2): 137-148.
- 9) 服部正. アウトサイダー・アート. 24-25. 東京都: 光文社; 2003.
- 10) 服部正. アウトサイダー・アート. 48. 東京都: 光文社; 2003.
- 11) 服部正. 日本の福祉施設と芸術活動の現在: アウトサイダー・アートと障害者アートのはざままで. 芸術と福祉. 藤田治彦. 247. 大阪市: 大阪大学出版会; 2009.
- 12) 服部正. 日本の福祉施設と芸術活動の現在: アウトサイダー・アートと障害者アートのはざままで. 芸術と福祉. 藤田治彦. 255. 大阪市: 大阪大学出版会; 2009.
- 13) 諫山正（監修）, 平川毅彦, 海老田大五朗編著. コミュニティビジネスで拓く地域と福祉. 京都市: ナカニシヤ出版; 2018.
- 14) 笈裕介（監修）. 地域を変えるデザイン: コミュニティが元気になる30のアイデア. 東京都: 英治出版; 2011.
- 15) 山崎亮. コミュニティデザイン: 人がつながるしくみをつくる. 京都市: 学芸出版社; 2011.
- 16) 光島貴之, 吉岡洋. 見えない世界を面白くするアート. ソーシャルアート: 障害のある人とアートで社会を変える. たんぽぽの家（編）. 28. 京都市: 学芸出版; 2016.
- 17) 古谷由紀子. 「社会的責任に関する円卓会議」の意義と課題: マルチステークホルダー・プロセスによる社会的課題解決モデルとして. 日本経営倫理学会誌. 2015. 22(0): 95-108.

注記

注1) 本研究では、地の文では基本的に障害を「障がい」と表記する。また、岩室あなぐま芸術祭では、障がいの者の製作する芸術作品を原則として「障がいの者アート」と呼んでいる。

注2) Kenoh.com (ケンオードットコム) HP、「障害者の作品を温泉街に展示して「岩室あなぐま芸術祭」福祉を観光へつなげる足掛かりにも」(2018.9.2) (http://www.kenoh.com/2018/09/02_anaguma.html. 2019/04/28にアクセス。)より部分的に引用している。このサイトでは、丁寧な取材がなされた記事が掲載されていて、第1回岩室あなぐま芸術祭の様子がよくわかる。岩室あなぐま芸術祭については、このKenoh.comのサイトなど、開催期間中の様子を伝えるwebコンテンツが充実しており、芸術祭期間中の様子を知るうえでは、本稿と機能的に等価である。

注3) ただし、チラシやHPを見ればわかることだが、岩室あなぐま芸術祭では障がいの者アートを前面化させていない。

注4) コミュニティをデザインすることについては寛ら¹⁴⁾ (2011)、山崎¹⁵⁾ (2011)などを参照のこと。

注5) 本稿では、筆者ら自身はもちろん、全てのステークホルダーの氏名の敬称を省略する。また、本報告の調査協力者は原則として全員共著者となっているため、調査倫理的には何の問題も生じない。

注6) こうした共著者Bのキャリアが、インクルーシブなコミュニティをデザインする際のきっかけとして芸術祭に目を向けさせたと思えるのはやすいことだ。

注7) 2017年12月10日(日)～12月17日(日)、新潟県小千谷市にある極楽寺にて開催された。

注8) 岩室あなぐま芸術祭HPより引用

(<https://www.iwamuro-anaguma.com/>)。2019/04/28にアクセス。岩室あなぐま芸術祭HPは岡村翼が制作、運営している。

注9) 岩室あなぐま芸術祭HP参照 (<https://www.iwamuro-anaguma.com/>)。2019/04/28にアクセス。

注10) フランス語「アール・ブリュット」の訳語として英語「アウトサイダーアート」が使用されている¹⁶⁾。

注11) 岩室あなぐま芸術祭HPより引用 (<https://www.iwamuro-anaguma.com/place>)。2019/04/28にアクセス。

注12) 東京・世田谷のハーモニー(就労継続支援B型事業所)が、自分たちの幻聴妄想の実態をかるたにしたもの。精神障害者たちの幻聴妄想の世界を知ること、共存の意味を学ぶことである。DVD『幻聴妄想かるたが生まれた場所』に加えて、女優の市原悦子さんによる『読み札音声』CDが付録についている(医学書院HPより(<https://www.igaku-shoin.co.jp/bookDetail.do?book=82112>) 2019/04/28にアクセス。))。

注13) 現在は常設物として、いわむろやの天井から吊り下げられている。

注14) 小林弘樹が運営するローカルインタビューマガジン。ホームページには次のようなメッセージが掲載されている。「ノンジャンル」のローカルインタビュー誌。芸術・芸能、政治、産業、宗教、学術など、多様なテーマでインタビューを展開。「生き方の多様さこそが、その街の豊かさ」をモットーに、靴底を磨り減らし、各街々を歩き、取材をかさねています」(<http://www.life-mag.com/introduction.html>)。2019/04/28にアクセス。

注15) http://life-mag-interview.blogspot.com/2018/08/blog-post_7.html.

2019/04/28にアクセス。なお、岡村氏からも本報告への使用許諾を得ている。

注16) 2016（平成28）年の相模原障害者施設殺傷事件で亡くなった障がい者たちは、全て匿名報道された。あれでは誰がこの世界に存在していて、誰がこの世界から亡くなったのかわからない。

注17) 円卓会議とマルチステークホルダーについては古谷¹⁷⁾を参照のこと。

注18) 小林愛実氏によるグラフィックレコーディング。グラフィックレコーディングとは、この場合イラスト版議事録である。小林愛実氏からは本稿への掲載許諾を得ている。記して感謝の意を表す。